

249
203

249-203



1200701783686

715

鹿の図



Kodak Gray Scale



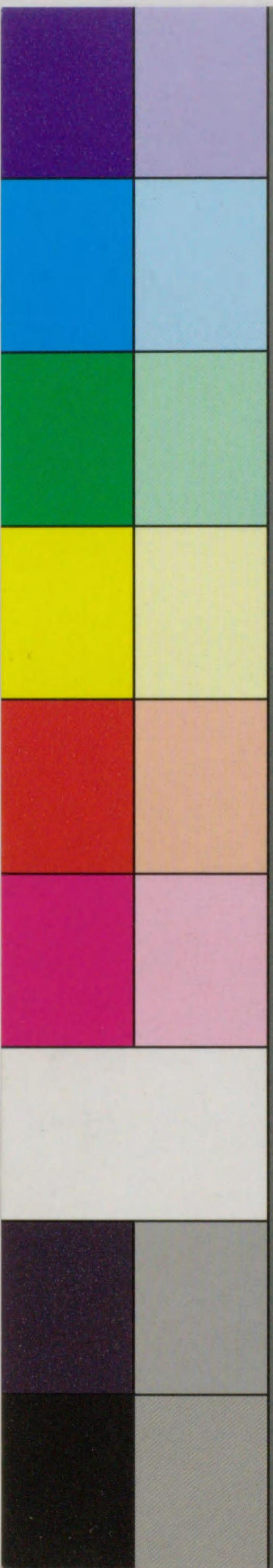
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Ruler markings in inches and centimeters

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



國小史

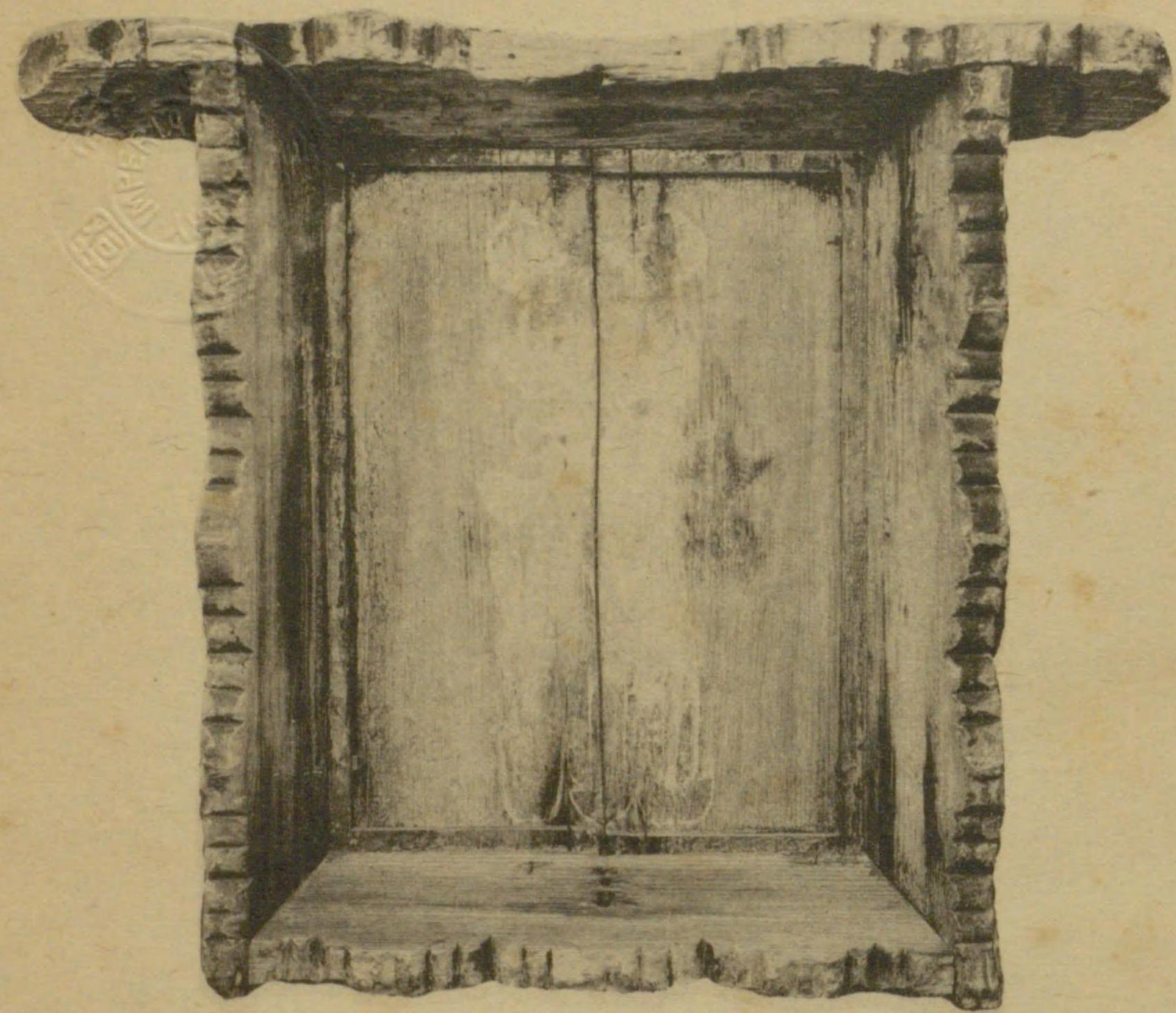




(物造建護保別特)

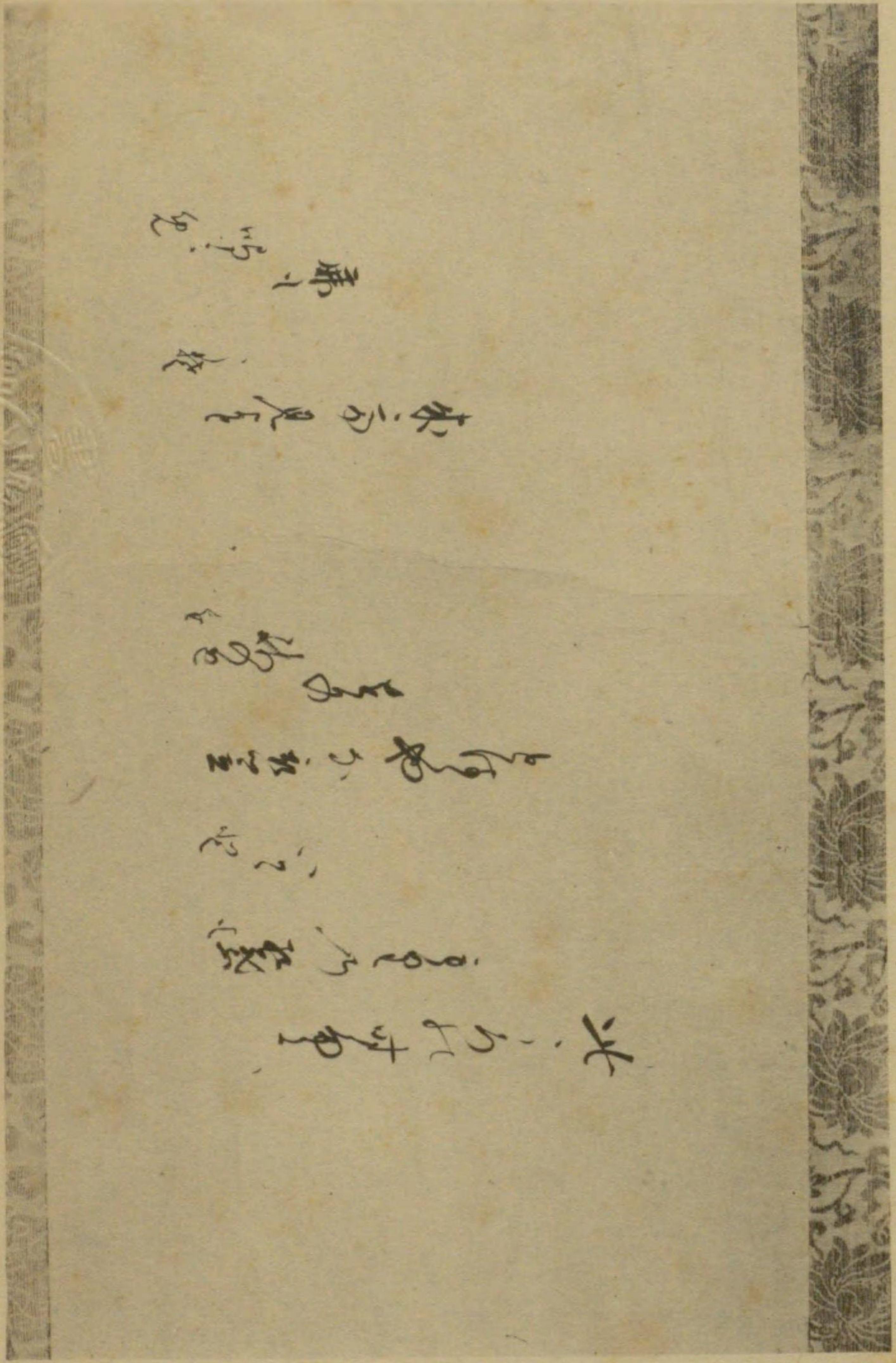
閑

金



(頂竟究) 額宸皇天松小後





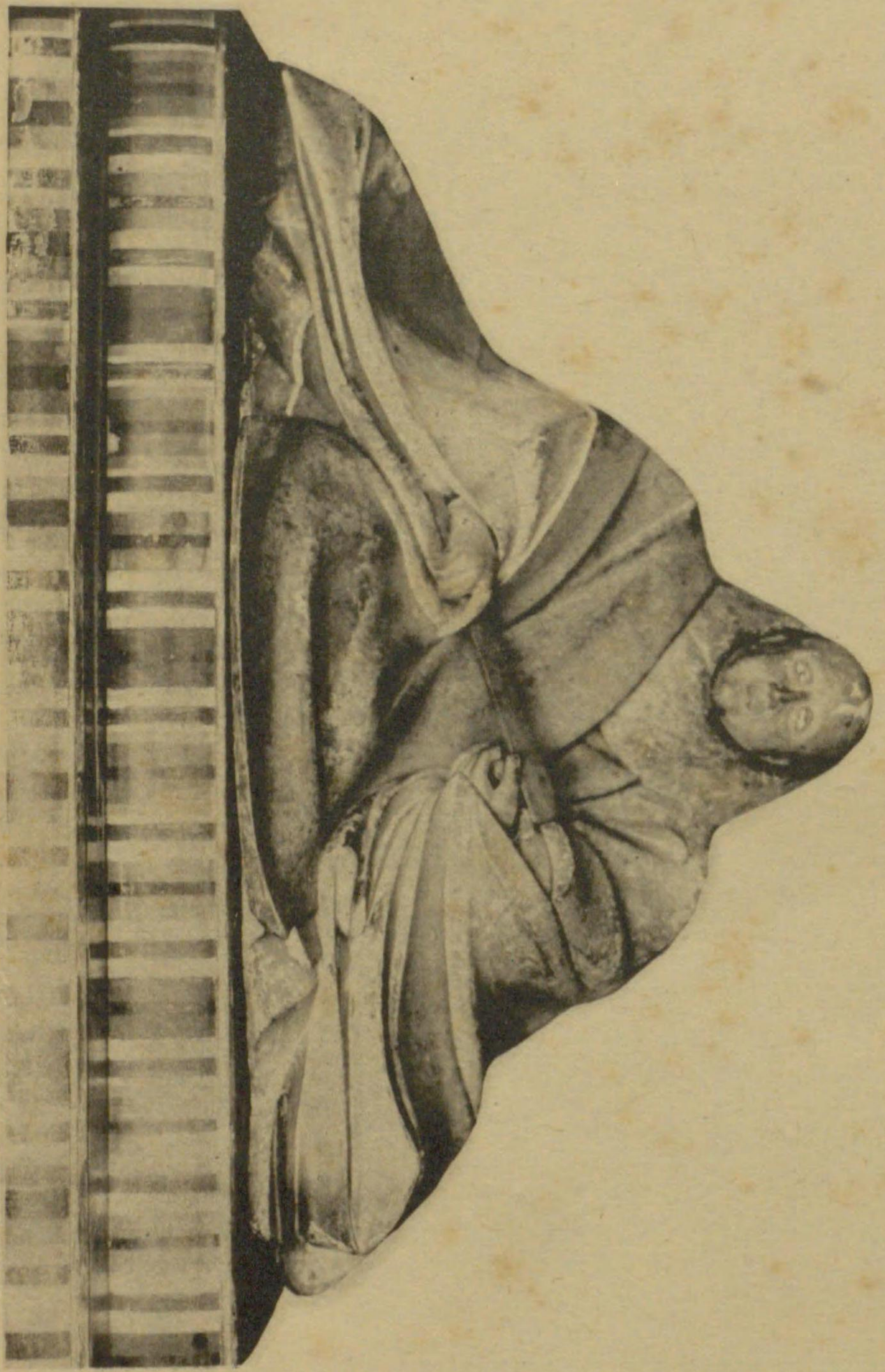
（聖御の山鏡水） 翰宸皇天尾水後



時人亦每求
時人亦每求
時人亦每求
時人亦每求
時人亦每求
時人亦每求
時人亦每求
時人亦每求
時人亦每求
時人亦每求



蹟筆師國窓夢山開



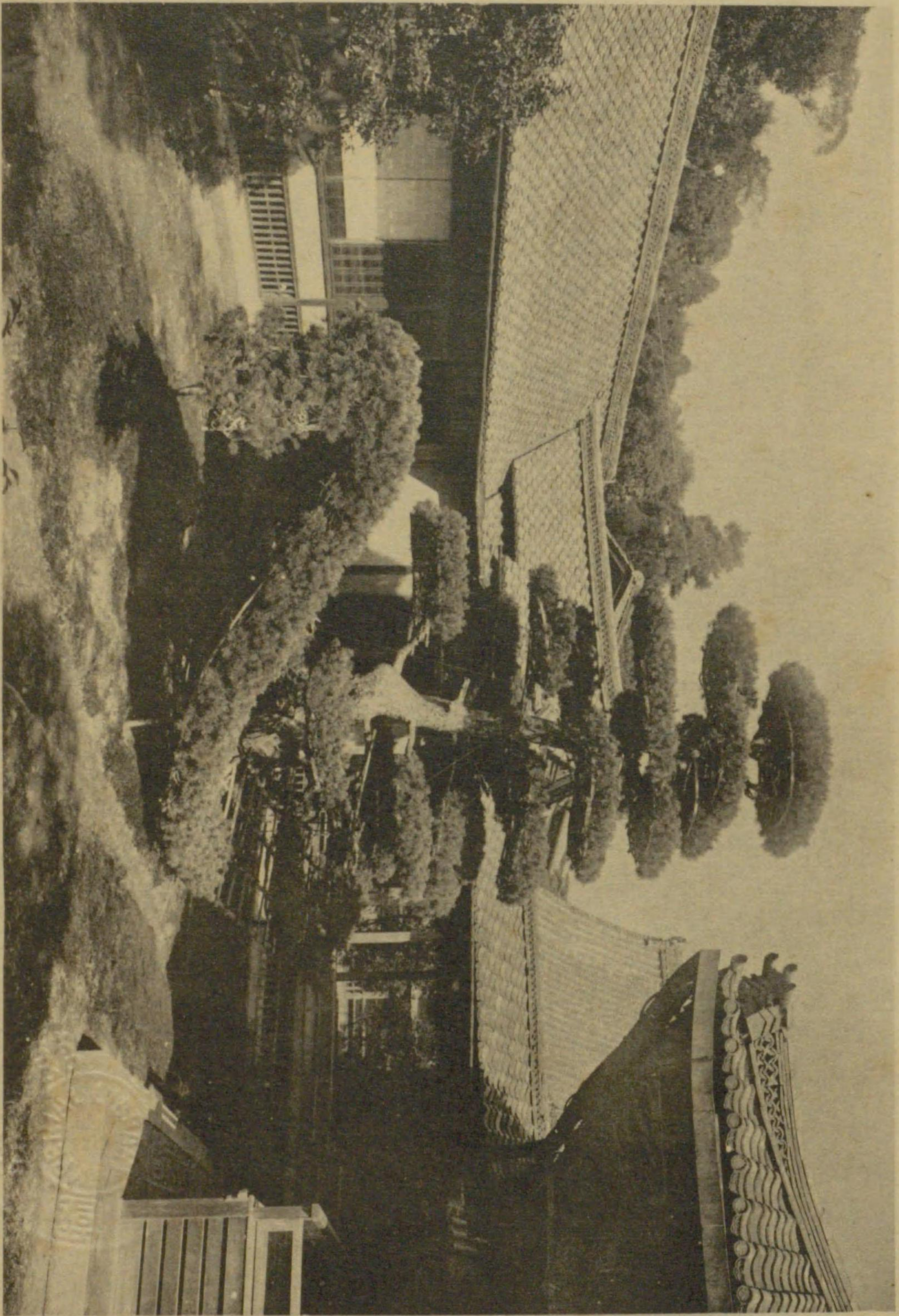
(寶圖) 像體法公滿義基開





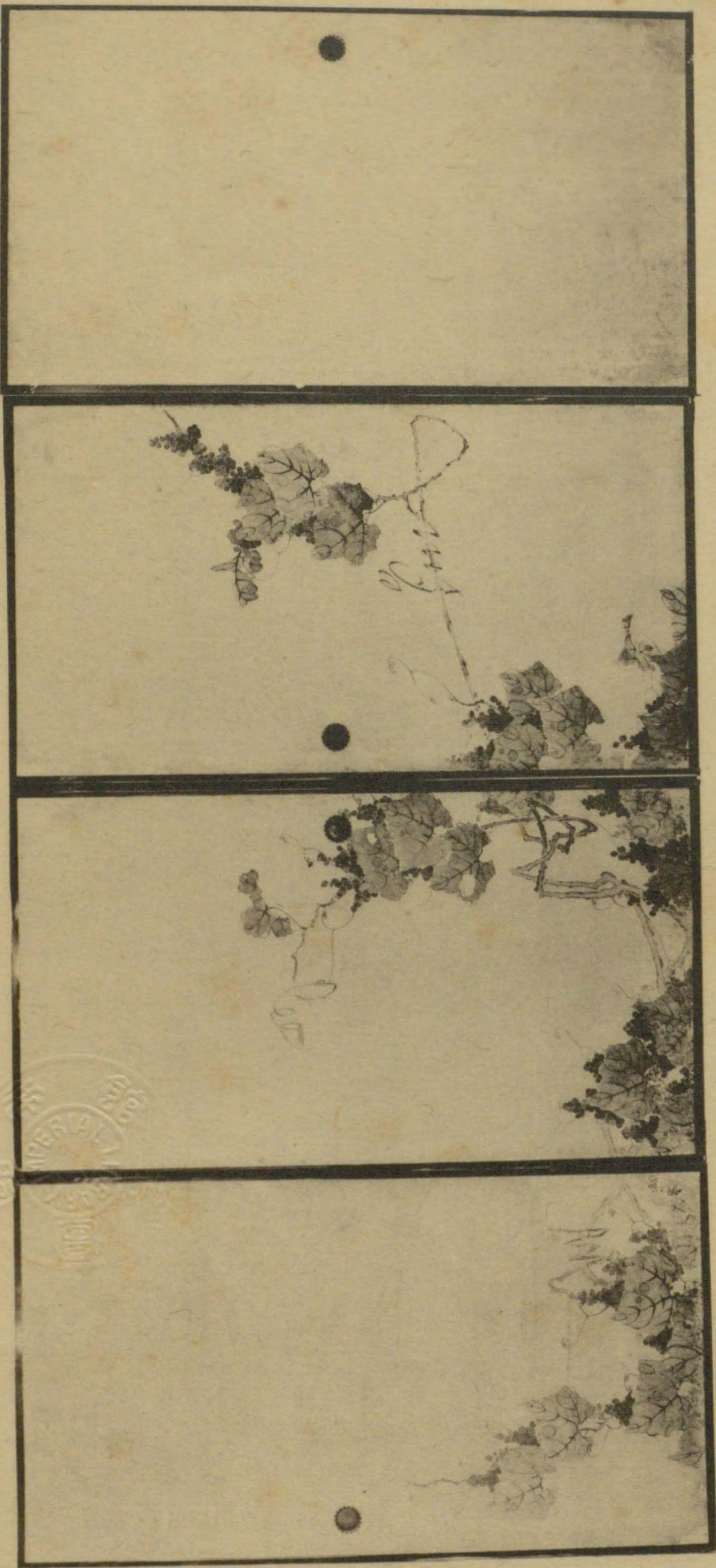
歌三首
 義満公和歌
 一、
 二、
 三、

義満公和歌



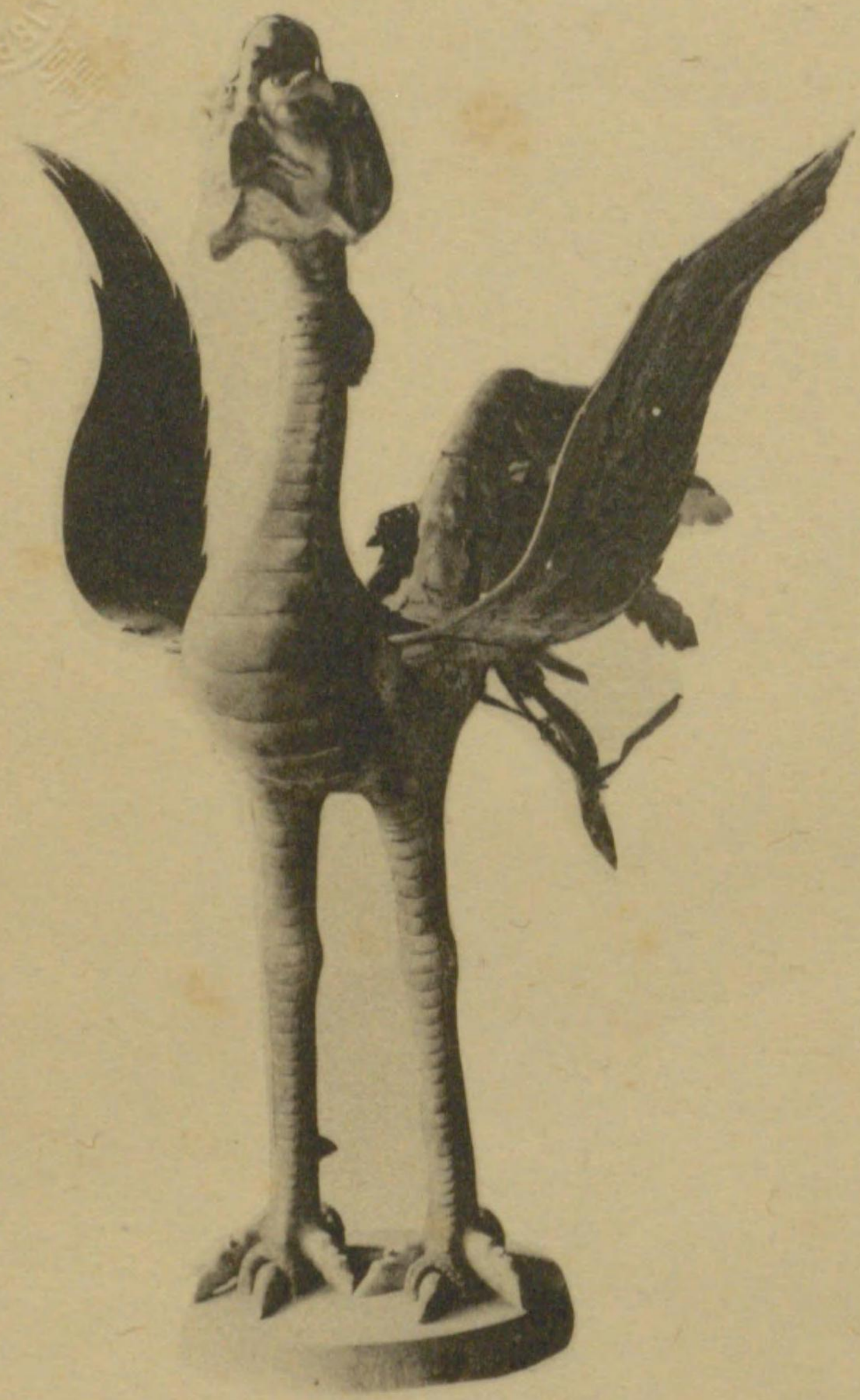
松の舟陸





（筆冲若） 畫壁障荷





風鳳の上屋閣金





金閣寺全景圖



金閣小史 目次

— 口 繪 —

一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、
金	金	若	陸	義	開	開	後	後	金
閣	閣	冲	舟	滿	基	山	水	小	閣
寺	屋	筆	の	公	義	夢	尾	松	(特別保護建造物)
全	上	葡	松	の	滿	窓	天	天	
景	の	萄		和	公	國	皇	皇	
圖	鳳	の		歌	法	師	宸	宸	
	風	圖			體	筆	翰	額	
					像	蹟			
					(國寶)				



— 記事 —

- 一、興造緣由
- 一、位置封疆
- 一、結構規模
- 一、景勝詩藻
- 一、開山履歷
- 一、著名歷代
- 一、寺門格式
- 一、皇室關係
- 一、武將歸仰
- 一、著名事項
- 一、貴重寶器
- 一、歷覽順序
- 一、詞藻餘錄

一、美術建築としての金閣

一、再中興貫宗和尚略傳

— 附 錄 —

一、鹿野苑

一、跋文

一、英文案内記

— 卷末挿繪 —

一、金閣庭園寫意畫（現住放光畫）

金閣小史

臨濟宗北山 鹿苑寺

興造緣由

南北兩朝の和議既に成りて

後小松天皇正統の皇位に即かせられ天下全く一元に歸して世は清平の治に浴し又戰塵を見ざる應永の元年

十一月征夷大將軍足利三代義滿公職を其子義持に譲り深く出塵の志を懷き其四年四月藤原公經卿の北山西園寺遺趾の風致を愛して之に代ゆるに山科の地を以てしこゝに鳳閣龍池を築き以つて嘉遼の地と定め相國

寺第三世佛日常光國師(空谷妙應)を禮して薙髮入道し天山道義と號して専ら單傳の妙旨に參じ道場に入り

て刻苦精鍊時に或は夜を徹して苦修し其眞摯宗師をして肯はしめ敬虔師の鞋を捧げて自若たり然れども未

だ以つて天下を顧みざる能はず朝鮮或は大明と交渉して文化の將來に力め美術畫院を起す等荒褪せる人心

を潤飾して戰亂慘禍の跡を絶たしめんことを圖る依つて以つて我國文化勃興の基源を爲すに到れり其間十

有二年を経て應永十五年三月 天皇の行幸を迎へて 皇情を慰め奉り其五月將さに薨せんとするに臨んで

將軍義持公に囑するに遺業を擧げて禪林に革め永く護法の道場と爲さんことを以てす義持公命を奉じて夢

窓國師を開山第一祖に勸請し北山鹿苑寺と扁して以つて天下の禪苑と爲せり世に是を金閣寺と稱す蓋し鹿苑は釋尊初轉法輪の地鹿野苑に因めるなり

位置 封疆

位置 山城國葛野郡若林庄衣笠村大字大北山小字鏡湖(現今京都市上京區金閣寺町)にあり衣笠山の東紙屋川の西前面曠漠たる北野に沿ひ背後聳然たる層巒に靠る封疆四萬壹千拾七坪官有地第四種に屬す古しるは寺領三千五百石其後一千二百石に減じ秀吉公以後は寺領三百五十石東西十六丁南北十五丁となりぬ

結構 規模

往昔有する境域三里に互り殿舎の結構極めて豪壯にして林園の規模頗る廣大なりしを推知するに難からず庭池二千餘歩を開き之に配するに三層の黄金臺を築きて銅鳳上に翔り長虹空に横つて拱北に通じ山園み水繞り麋鹿濯々白鳥鶴々たり名花異艸奇石怪松各其所を得隆樓傑閣畫棟彫梁東西南北に碁布星羅す總門は紙屋川の西に聳え礎石今尙存す而して正殿を芳徳といひ八棟造り八龍を立て、金色に彩り拱北樓の間には反橋を架し往來の人をして天空を歩むかと疑はしむ蓋し當時諸侯の士競つて土木の事に従ひ構造する處なれば其壯麗思ふべし而して義持公革めて禪苑となすに及んで各殿を改修或は新興して佛殿、泉殿、護摩堂、

懺法堂、舍利殿、天鏡閣、小御堂、地藏堂、三身堂、不動堂、看雲亭、大塔、輪藏鐘樓等臺を並べ檐を列ねて輪奐の盛を極む此外寮舎拾院あり皆古史に歴載する所なり然れども今猶ほ舊態を存するものは僅かに金閣と庭園のみ爾餘の殿堂並に房舎の屬は各其の建營を異にす即ち是を列記せば

金閣 應永四年四月足利義滿公建立(明治三十年十二月二十八日内務省の指定を以て特別保護建造物に編入)

附言

明治三十七年七月古社寺保存金を下して大修繕の工を起し同三十九年九月に到り全く竣工を告ぐ前後三年月を閲すること二十有七費を費すこと貳萬貳千八百餘圓(此内寺門負擔額金四千圓)此間老練の技師熟達の工匠と舊規を攻へ古法に則り一繩一墨も忽諸に下さす輪奐燦然として應永の舊態に復するの觀あり

漱清 同上

方丈 延寶年中 後水尾天皇勅營

大書院 享保年中第五世文雅東堂再建

小書院 同上

鐘樓 同上

鎮守 同上

唐 門 天保年中北湖東堂再建

夕佳亭 明治七年再建

不動堂 天正年中浮田中納言再建

庫 裡 天保年中北湖東堂再建

拱北樓 明治廿七年貫宗和尚再建

此他附屬の建物二十字は皆天保年間の再建なり

景勝詩藻

鹿苑寺六勝及其詩……………法如上人

夕佳亭

亭榭黃金界 林園好一臨 晚來鐘磬響 瀟灑空人心

天鏡閣

紺園高寶閣 湧出逼虛空 縱倚窺天路 兼知呼吸通

龍門泉

飛泉千萬丈 何處落人間 不啻鯉魚化 天龍自往還

鏡湖池

滿目芙蓉水 香風鏡裏波 忽聽梵貝起 疑是采蓮歌

不老石

頑然一片石 何歲在神州 鹿苑長聞法 由來幾點頭

渡樵橋

小橋如畫裏 煙樹擁山阿 不見牛羊下 時逢樵者過

現任放光窟

和夕佳亭

紫雲櫺小榭 日夕可登臨 先聖遺芳在 青山萬古心

天鏡閣

太清塵不點 瑤閣照虛空 因憶黃梅客 何時借路通

龍門泉

巖前三汲浪 一默雷過山 點額知多少 終年空往還

鏡湖池

洞天懸古鏡 湖上湧銀波 堪笑寒山子 千秋作白窠

不老石

小拳天上落 風雨幾春秋

我罵它成佛

頑然不點頭

六

渡樵橋

不度驢兼馬 虹橋臥澗阿

空山月明夕

時有白雲過

境內八勝

法水院 潮音洞

究竟頂

鏡湖池

巖下水

龍門瀑

銀河泉

安民澤

同 八景

鷹峯晴嵐 六所夜雨

金閣秋月

鹿苑晚鐘

即休夕照

衣笠暮雪

鏡湖鴛鴦

龍門瀑布

同 十境

天鏡閣 拱北樓

鏡湖池

釣雪橋

縱目峰

菩提溪

宣明室

明王殿

榊雲廟 安民澤

同 名石

夜泊石 九山入海石

赤松石

島山石

臥龍石

出龜入龜

臥牛石

大黑石

走馬石 屏風石

渡天石

布袋石

女龍石

露盤石

雲根石

採蘋石

鏡石 猿巖

夜啼石

同 名勝

天山 竹窠

鳳林

夜泊

睡眼

無準

是誰

阿崇

排壠 盜風

竹溪

照山

西笑

北澗

得閑

鷺峰

對雲 晴雲

菖蒲溪

望雲澤

雨賜澤

常觀溪

龍觀溪

渡樵橋

小屋溪 無語溪

春日宮

紙屋川

飲馬川

小松臺

葦原島

紅葉山

出島 淡路島

虎溪橋

白龍塚

同 名水

巖下水 銀河泉

獨鈎水

同 名木

ワビスケ椿 陸舟松 櫟

以上の造營及び一樹一石皆是れ歴史の實證にあらざるなきを以つて大正十四年内務大臣は全境域景致を以つて史蹟名勝地鹿苑寺金閣庭園と指定せらる

開山履歷

開祖字夢窓名疎石 勅賜夢窓正覺心宗普濟玄猷佛統大圓國師大和尚は

七

後醍醐天皇

光明天皇

光嚴天皇

後光嚴天皇

後圓融天皇

後花園天皇

後土御門天皇等七朝の戒師と仰かれたり

扶桑禪林僧寶傳云

國師諱智曜姓源氏勢州人 宇多天皇九世孫 中略 九歲出家依乎平鹽教院以居 中略 十八爲大僧受具

尋學顯密二教一夕夢遊中國疎山石頭二刹一龐眉僧持達磨像授之爾善事之既寤嘆曰洞明吾本心者其

唯禪觀乎遂更名疎石字夢窓謁無隱範公至于建仁寺繼參一山寧和尚乃至 往萬壽見高峰日和尙 (後嵯

峨天皇皇子號佛國國師) 乃至嘉元年三月一夕坐久偶作靠壁勢身忽仆去豁然大悟作偈自慶有等閑擊

碎虛空骨之句亟見高峰求印可峰喜溢顏而囑曰西來密意汝今既得之善自護持出其師佛光手書一通卑

之以寓付屬之意云々

委しくは夢窓年譜夢窓錄本朝高僧傳本朝禪林僧寶傳延寶傳燈錄等にあり而して天龍寺相國寺臨川寺共

に開山始祖たり其他洛西の西芳寺甲州の惠林寺濃州の虎溪山鎌倉の瑞泉寺阿波の補陀寺土佐の吸江庵
播州の瑞光寺伊勢の善應寺等山を開くこと十刹を下らず勸請開山たること數を記せず銀閣寺も亦其一
なり

著名歴代

凡當山の住持は悉く貴冑甲族の門に出で道德 天聽に達するものあり聲譽將軍を動かすものあり力を宗門
の振張に致し或は寺門の興隆に盡し皆一世の儀表たるに堪へたり即ち二世照山周嵩西堂は足利義晴將軍
の第三子第三世西笑兌和尚は津田氏の男第四世鳳林章和尚は勸修寺大納言の男第五世丹崖誠は市橋下總守
の男第六世文雅彦和尚は四辻亞相の男第七世性峰廓は久留島信濃守の男第八世無聞聰和尚は勸修寺黃門尹
隆卿の男第九世龍門猷和尚は四辻三位卿の男第十世以中保和尚も亦た名門の出第十一世北澗學和尚は甘露
寺大納言の男等皆縉紳の公子たり而して二世周嵩西堂は足利義晴將軍の第三子にして即第十三代將軍の
弟なり時に周嵩世齡纔に十六歳法階漸く侍者にして此名藍に主席たり故に當時の俗當山を稱して侍者の御
所といひしとそ而して周嵩侍者の三好松永等叛逆の爲に義輝將軍と與に殺害せられしは載せて史乘にあれ
ば歴史家の普く知る所なり第三世西笑和尚の如き當時一宗の泰斗にして而も文壇の巨擘たり秀吉公家康公
等歸仰殊に厚し文祿三年秀吉公伏見に大光明寺を建立し西笑和尚を請して住持たらしめ其庫裡修營にあた

りては諸大名に令して勸進せしめ江戸大納言家康公以下山崎左馬にいたる百二人各々自筆の勸進帳あり慶長二年八月大明國使者至る其返翰たる秀吉公西笑和尚に命して起草せしめ又朝鮮征伐に際し彼國の使者いたる是亦和尚をして策命文を讀ましめ或は筆談せしめ其他書契の事専ら西笑和尚をして之を掌らしむ或は大佛耳鼻塚供養の導師卒都婆の文今尙存之等の事俱に寺史に炳焉たり秀頼家康兩公等の歸仰亦之に同じ第四世鳳林和尚は西笑和尚の法嗣にして當山の席を繼ぎ皇室の榮寵を忝うせり其當時に於ける禁裏の御模様等は隔莫記と題する數十卷の日記及參内記にて之を詳らかにす今寺門に藏して史乘を裨益するの珍寶となせり故に宮内省圖書寮及東京帝國大學に於て既に之を複寫せられたり即ち和尚は後陽成天皇御外戚の因縁により後水尾天皇の寵幸最も厚く時々鳳召に應じて參内 每節禮は勿論諸所

行幸供奉或は

宮中に於て

御法事を修し奉り或は

御禪話に對へ奉り又は詩聯之御會天皇と鳳林長老と聯句御親筆及聖護院法親王御筆二軸今尙之を珍藏す

獻茶之御遊日夕

玉座に陪し奉り時々

御物を賜ふ等の事故擧に違あらず就中承應元年五月十六日

天皇御落飾前御着

御法衣御掛絡を拜領し同月廿三日

天皇御落飾に際しては

勅を奉じて

玉座に侍し奉り

御法式御調度の諸務を奉仕し又承應三年九月

金縷伽梨及衣笠御製宸翰并詩聯玉詠等を賜はる今尙存之

其後御歴代

明正天皇

後光明天皇

後西院天皇

靈元天皇

東福門院等御歸依亦

後水尾天皇に同じ蓋し鳳林和尚か此の

恩寵を蒙るもの一には

後陽成天皇御外戚の因縁によるといへども抑も又鳳林和尚が道德の乏しからざるに職由せずんばあらず時々宮中の御修法及御禪話又は御落飾等の事皆其法徳のいたす處なるべし第六世文雅和尚は鳳林和尚の法嗣にして亦

至尊の恩寵を蒙り毎時參内

玉座に奉侍し御法問御禪話等の事鳳林和尚に異ならず就中延寶六年方丈

御勅營及本尊觀音薩埵の靈像又は佛舍利寶塔御寄附等の事皆文雅和尚の法徳による加之其當山興復に效あるや大書院小書院をはじめ數多の棟梁を鼎新し諸般の什器悉く之を具備せしむ實に當山の中興と云べし第八世無聞和尚亦た聰明にして道學に通じ其職を辱かしめず第九世龍門和尚出格の機あり第十世以中和和尚穩密の徳を養つて北澗を出だす皆宗師の器なり第十一世北澗和尚も亦碩學にして以酓の修文職に任すること二回且つ力を當山の饒益に盡す其效文雅和尚に亞ぐといふべし北澗和尚の後輪番の制となり荒廢の餘を受けて貫宗和尚の住せらるゝや恰も維新變革の後なれば寺祿は奉還し山林は上地となり寺門の衰頽殆ど其極に達す和尚則ち銳意是が興復を企畫し官に請て修繕維持の下賜金修繕費金七百圓保存金七百圓を受け有志に圖りて保存の講法を設け前後兩度の大修繕を完成し拱北樓を再建し不動山の還附を得寺門維持の方法を確立し凡百の事物器具整然として完備す其功文雅北澗二師に譲らす實に當山再中興の祖と云ふべく而して

一方貫宗和尚を補佐せる法嗣寛道和尚の功亦没すへからざるものありかくて寛海和尚其後を董すやよく其遺旨を承けて寺門の經營に當り常足亭、新寮其他を完成し和尚遷化の後現住敬宗席を董すに到る

寺門格式

維新以前に於る寺門の格式を原ぬるに

- 一、朱印高三百五十石を有し本邨及西院邨の地頭たり
- 一、境内人足山林竹木守護使不入諸役免除境内東西十六町南北十五町の別朱印あり
- 一、金閣には

後小松天皇宸筆究竟頂の寶額を掲げ

佛殿には

後水尾天皇御寄附觀音薩埵の靈像及舍利寶塔並に今上天皇聖壽無疆の尊牌を安置し

殿堂は

後水尾天皇の勅營にかゝる之に依つて

後小松天皇

後水尾天皇（現今は孝明天皇明治天皇大正天皇）等の

御尊牌を安置し常に

列朝先皇皇后の御冥福を奉修し

今上天皇の聖壽無疆を懇祈し奉る等毎歳々時又は

御踐祚御即位の大禮及

崩御獻經等に參内するの恒例なり

一、幕府の慶弔及朱印下付又は住持繼席等には幕府に參勤獨禮謁見の寺格たり

本寺相國寺に對しては附庸たるも他に對するときは本寺同様の資格たり

一、僧官色衣は本寺同様にして其住持たるものは官家の子弟又は猶子にあらざれば席を當山に繼がしめず

一、以上は舊制にして現今は相國寺派別格地に過ぎざれども尙ほ能く典禮を行ひ舊規を過らず依つて以つて宗門内外の歸崇する所たり

皇室關係

元西園寺といひし頃

御歴代の聖主又は皇后皇妃等數次行幸啓ありし事は古史に散見する處なるも年代遼遠なれば之を掲げず義滿將軍創業以來に於る應永四年四月

後小松天皇行幸數日御駐輦同十五年三月再び

同天皇御臨幸清遊旬日にわたらせられ中古寛文元年には

後水尾天皇御臨幸夕佳亭において獻茶の

御遊あり本堂は

同天皇の勅營にして本尊及舍利寶塔は同じく

御寄附たり加之鳳林文雅二長老毎時

御物を拜戴し

靈元天皇は境内不動尊御信仰屢々

御代參を立てさせられ近くは明治十年中

皇太后宮

皇后宮兩陛下行啓あり又明治三十二年

皇太子殿下（大正天皇）行啓大正二年

皇太子（今上天皇）淳宮光宮各殿下 大正八年

皇后陛下 大正十五年 澄宮殿下行啓其他毎時各皇族殿下台臨等聖愛玉賞の靈刹たり且つ此の外英國皇太子等外國の貴族も亦台臨あり

將軍義滿公が佛日常光國師に歸し剃髮受戒終に各業を禪那の道場とあらたむるまでにいたりしは既に興造の緣由に述ぶ其後秀吉公家康公の兩幕府が西笑承兌和尚に歸し浮田秀家卿が不動尊を信仰せし等其規模の見るべきものは秀吉公家康公俱に三百五十石の寺田を寄せ守護使不入の特權を加へ浮田秀家卿の不動堂再建等是なり

著名事項

一、當山は

天皇皇后皇族王族妃の宮等御臨幸行啓の聖跡なる事

一、本堂は

先皇の勅營なる事

一、本尊は

先皇の御寄附にして而も名工彫刻の靈像なる事

一、寶器は

先皇の宸翰並時々拜戴の御物を藏する事

後深草天皇宸翰

龜山天皇宸翰

後小松天皇宸翰

後栢原天皇宸翰

正親町天皇宸翰

後水尾天皇宸翰

後西院天皇宸翰

後水尾天皇御着黃生絹之御衣

同天皇御物金縷之伽梨

一、内外史乘に顯著の名跡なる事

菡 蘆 集 本朝文粹

北山行幸記 百練抄

管見記 中務司日記

京都將軍家譜

相國寺御塔供養記

椿葉記

法皇外記

園太曆

山城名所誌

增鏡

都名所圖繪

太平記

國史略等何れも當山及境内佛堂の事を掲載せり

一、五百年以前の經營にして名人の設計にかゝる建營並に林泉を存する事

一、元享釋書並本朝高僧傳所載の高僧淨藏貴所の遺跡たる事（袈裟を笠む）

一、詩歌及戯曲に著名なる事

一、不動尊は衆庶の信仰にかゝる靈佛なる事

一、有名茶亭を存する事

一、特別保護建造物及國寶を有し史蹟名勝の庭園たる事

貴重寶器

○御宸翰

一後深草天皇

一龜山天皇

一後小松天皇

一後栢原天皇

一正親町天皇

一後水尾天皇

一後西院天皇

一昭憲皇太后

○皇族御筆

一本覺院宮瀧の畫

一淨照院宮御書翰

一輪王寺宮蘭の畫

一林丘寺宮山水畫

一大明院宮蓮の畫

一聖護院宮

一中和門院

一伏見宮貞敬親王

一同典仁親王

一同邦家親王

一同貞愛親王

一小松宮彰仁親王

○公卿武將筆蹟

一飛鳥井榮雅卿

一烏丸光廣卿

一園前大納言

一勸修寺卿

一中院卿

一有功卿

一定家卿

一尊氏公令狀

一義滿公和歌

一義持公達磨の贊

一義教公下知狀

一義政公猿の畫

一義昭公

一秀吉公朱印

一家康公書翰

一家康公黒印

一秀忠公書翰

一伊達政宗書翰

一板倉周防守書翰

一毛利駿河守の畫

一畠山義植公

一井伊掃部頭

○高僧筆蹟(年代及本朝支那不別)

一佛光國師

一佛國國師

一夢窓國師

一大燈國師

一普明國師

一義堂禪師

一常光國師

一絶海國師

一佛頂國師

一密庵禪師

一虛堂禪師

一悟心禪師

一一山國師

一中峰禪師

一愚極禪師

一一休禪師



- 一道元禪師 一正宗國師 一盤桂國師 一橫川禪師
- 一可翁禪師 一澤庵禪師 一楊月禪師 一江月禪師
- 一隱元禪師 一心越禪師 一木庵禪師 一卽非禪師
- 一高泉禪師 一道者元 一為霖大師 一董堂禪師
- 一古溪禪師 一寂室禪師 一仙崖禪師 一策彥禪師
- 一山庵禪師 一曇一禪師 一敬義禪師 一西笑禪師
- 一鳳林禪師 一大典禪師 一維明禪師 一東嶺禪師
- 一大用國師 一維天禪師 一雪潭禪師 一洪川禪師
- 一越溪禪師 一獨園禪師 一峩山禪師 一中正藏司
- 一賣茶翁

歷代頂相歷代墨跡其他數十點

○像及書畫(年代不別)

- 足利義滿公坐像自作 (明治三十四年八月二日國寶編入)
- 一觀世音 定朝作 一夢窓國師之像 一三尊佛 運慶作 一巖屋觀音 惠心僧都作
- 一不動尊 弘法大師作 一四天王之像 弘法大師作 一傳大士普現成像 周文 一周之冕琴基書畫

- 一唐畫涅槃像 一仇英蜀棧道畫 一錢穀讀碑之畫 一兆殿司文殊之像
- 一兆殿司三行之畫 一張瑞圖書 一唐畫十六羅漢 一詹景鳳書
- 一隄南師書 一定家卿色紙 一三玉集 一三體和歌
- 一周文山水畫 一雪村山水畫 一義政公月百首卷物 一東坡風竹畫
- 一明人夏景山水 一元明人書卷物 一雪峯花鳥 一光信近江八景畫
- 一光孚三韓征討繪卷物 一沈子潤伯夷叔齊畫 一西金居士羅漢 一蕭白山水
- 一光琳達磨畫 一永真出山釋迦鳳凰畫 一永真虎 一常信山水
- 一雲谷達磨 一永德鷹 一啓書記達磨 一二天觀音
- 一雪舟富士畫 一養朴達磨畫 一宗達韓退之騎驢圖 一仙嶺柘榴之畫
- 一應舉豆狗子 一能阿彌松月杜鵑之畫 一光琳須磨明石鳴門畫 一利長山水
- 一程赤城贊鯉之畫 一宗達萬歲之畫 一柳里恭墨竹 一元信寒山拾得畫
- 一若冲玉熨斗 一若冲箒狗子 一若冲虎 一若冲寒山拾得
- 一宗和書翰 一高泉釋迦之畫 一宗中書翰 一不味書翰
- 一秋月二王 一應舉趨倒淨瓶畫 一宗甫歌之富士 一利休書
- 一松花堂 三幅 一秋月壽老 一木米觀音 一大雅山水

- 一竹田山水
- 一英一峰 二幅
- 一淇園寒山
- 一東涯詩
- 一直入富士
- 一寬齋瀧
- 一山陽詩
- 一對山山水
- 一其他數十點

○古器具類

- 一瓢形釜 (藤四郎作)
- 一吳器茶碗
- 一蒔繪料紙文庫(小滿作)
- 一茅屋釜
- 一義滿遺品料紙文庫
- 一鹿蒔繪硯箱(光悅作)
- 一古伊部獅子香爐
- 一義滿遺品麒麟香爐
- 一夢窓國師鐵鉢
- 一木偶萬歲(大江定元作)
- 一古代物庚申
- 一高臺寺蒔繪水手桶
- 一古代青銅鉢
- 一瓢の煙艸盆宗和好
- 一唐桑小休臺宗甫好
- 一ハンネラ水指
- 一建蓋天目茶碗
- 一青貝天目臺
- 一青貝八角食籠
- 一青銅菊形花器
- 一咸陽宮古瓦硯
- 一相生硯
- 一老子騎牛香爐
- 一金閣鳳凰及四方の鐸
- 一青貝入坐屏風
- 一義滿公冠
- 一貝百種
- 一唐製承露盤
- 一義滿公自作笏
- 一兼光短刀 藤丸
- 一茶の具 數十點
- 一名香 數十種
- 一其他 數十點

○古屏風類

- 一四季艸花金屏風相阿彌筆
- 一菊の屏風光琳筆
- 一松人物畫 友松筆
- 一近衛三藐院殿の詩歌

- 一唐子遊び蘆雪筆
- 一飲仙蛇足筆

○襖及壁畫

- 一探幽 二十四枚
- 一同戸 四十枚
- 一若冲 十八枚
- 一同壁畫大書院全部
- 一住吉法眼小襖 四枚

○藏書

- 一內典 五百五十部 三千五百卷
- 一外典 三百餘部 二千五百卷

歴覽順序 (林泉案内)

殿 堂

- 方丈は延寶年中 後水尾天皇の勅營であります
- 總體の襖の畫は狩野探幽の筆
- 扁額は東明心越禪師の筆鹿苑寺は寺號であります通稱は金閣寺
- これから各所に陳列してあります軸物及いろいろの寶物類はをり／＼變りますから茲にはのせてありませぬ
- 本尊聖觀世音は定朝の作 東福門院の御念持佛 後水尾天皇の御寄附で御座います右なるは開山夢窓國師左は開基義滿公法身の像
- 此庭は相阿彌の作
- 向の椿は 後水尾天皇御手植ワビスケと申します
- 前の石は女龍石其次は布袋石其次が走馬石其次が蟠龍石其次が露盤石と申し皆名石であります
- 此松は陸舟松と申し天下の名木であります
- 此額は朝鮮國海峰の筆

- 此書院は享保年中の再建
- 總體の襖と壁の畫は伊藤若冲の筆
- 上段は後水尾天皇臨御の玉座で御座います
- 小襖の畫は住吉法眼廣道の筆

庭 園

- むかふにもありこゝにもある大木は樅の老木であります
- 鐘樓の鐘は唐製で黄色鐘と申します
- あの傍の古墳は淨藏貴所の墓
- これが金閣と申し世に有名なる三層閣で御座います
- 此所にならんである石は夜泊石其向は夜啼石
- この所を法水院と申し正面の三尊は運慶の作東壇は開山夢窓國師西壇は開基義滿公此像は國寶になつてをります

- 此所は漱清と申し義滿將軍御手水の處向の石は畠山石燈籠手前一つの石は赤松石
- あれなるは九山八海石こちらの二ツの島は出龜入龜と申します

- 向の島は葦原島其手前なるは鶴龜島
- 池の名は鏡湖池向の岡は紅葉山
- 二階の名は潮音洞巖屋觀世音は惠心僧都の作協立四天王は弘法大師の作天井の畫は狩野正信の筆
- 西に見ゆるは衣笠山であります
- 三層は究竟頂と申し正面の扁額は 後小松天皇の御宸筆 この處は總金張りで金閣の名はこれから起つたのであります
- 天井は楠木一本で作つたと申します

北 園

- 此古廟は神雲と申し當山の鎮守春日明神で御座います
- 此水は銀河泉義滿將軍の御茶の水
- 此水は巖下水義滿公御手水に用ひたと申します
- 瀧の名は龍門其下の石は鯉魚石鯉の瀧のぼりの形で御座います
- 此垣は金閣寺垣此橋は虎溪橋
- 池の名は安民澤島の五輪の塔は白蛇の塚

- 此石は貴人楊此石燈籠と手水鉢は義政公の愛玩
- 數寄屋の名は夕佳亭金森宗和の好 後水尾天皇獻茶御遊の聖跡で御座います萩の違ひ棚南天床柱とは此所で御座います即休の額は僧高峰の筆
- 萩棚の真中の木は鶯宿梅と申します
- 此高ごのは拱北樓と申し義滿公御居間の舊跡
- 扁額は本覺院宮の筆 襖は蛇足の筆
- 是から不動様へ御參詣の上御歸りなさい不動尊は當山開創以前より勸請せしもので本尊並に脇士とも石作の立像弘法大師の御作と申します 靈元天皇の御信仰佛で御座います今の堂は天正年中浮田中納言の寄附と申します其傍に別に不動尊を安置してあります之は化不動と申しまして靈驗あらたかに御座います
- 堂後の名水は獨鈷水と申し弘法大師不動尊についての由緒が御座います眼病胃病などに效驗ありとて多く求めに參ります

詞 藻 餘 録

北寺看花

會鹿花寺

興

彦 龍

啼鳥寺閑山更佳 相公古廟鎖煙霞 老僧持咒保春否 只見棠梨遺愛花

鳳林年少韻

北野宮傍小梵宮 有梅籬落月方融 君家是可減春色 黃鳥含來一片紅

九十風光三十正 被花繚亂笑生平 一聲喚醒尋君夢 睡海棠前喚打鸞

雨後山色

會鹿苑寺子純落髮之後

青山不改雨前容 色在夕佳朝爽濃 三伏涼人池館上 西湖雪後對諸峯

和鹿苑和尚韻

代人鹿苑即惟明和尚也

人間涌現率陀時 猶覺皇天雨露滋 祖教回春左街柳 度門梁棟只斯枝

仙苑精廬起廢時 台星光傍畫檐滋 法輪再轉調羹手 布蔭梧桐名上枝

夕佳樓

朝日芙蓉午牡丹 看花時易看山難 佳期別在夕陽外 人待月昇凭畫欄

松鷗老人昨遊北山鹿苑作詩友社諸公從而和之余亦附其尾云

開道題詩遊洛北 上方楓樹倚雲燃 四華雨處園開鹿 八景雪時山似燕

宰相院深留待漏 將軍閣古記凌煙 殘僧白髮寺黃葉 天下叢林搖落前

宿鹿苑寺

大典禪師

夜話不知山月生 俄臨衾枕起吟行 倚欄寂寂千松影 一片銀蟾波底明

遊鹿苑寺

享保癸丑夏日

東涯胤

松杉影鎖給孤園 鹿苑台公遺擘存 榜揭宸章明日月 池開寶鏡廓乾坤

石橋跨澗無岐路 籬落依山自一邨 欣與同遊三兩輩 林間小憩就壺餐

金閣

賴山陽

狼獾誰料竟生靈 想見牙鬚張猛威 銀閣何如金閣熱 併容南北日光輝

金閣寺

廣瀨青村

一聲寒磬隔溪雲 絹蓋峰頭日已曛 紅葉碧苔金閣寺 山僧尙說舊將軍

同

清國兵部郎中

傳雲龍

詩僧岐路暫盤桓 飛白一山爐火丹 四百餘年訪鹿苑 雲遮金閣不知寒

和

貫宗和尚

觀風察俗日盤桓 深識忠心一片丹 萬里慰君海門曉 千仞富嶽聳天寒

金閣寺晋山

三十
現光 放 窟

豈趁世間名利關 無心隨處有青山 薰風吹上黃金閣 月到繖峰夜愈閒

鹿苑寺記

故文 淵 俗稱吉田藤吉(尾州人)

世以金閣爲通稱而呼其名者太鮮矣是大將軍足利氏義滿之所營造也以其法謚鹿苑爲寺號焉初鎌府之季失其鹿天下爭逐之祖尊氏與其族犄角獲之以一清中原三世之主實爲義滿英偉有大略世居于室町邸統御諸侯置管領于幕府以控制關東於是綱紀大張權勢日熾累遷大相國嘗起別館于洛外相地四方山水清絕無若此所乃大經營焉高閣三層帖飾黃金而銅鳳孤栖其屋巔名曰金閣下臨池水碧潭回環發其源于瀑流曰龍門又有湧泉二道曰鹽湫曰煎茶皆合而注焉怪石巉巖秀立其中每各異形似島嶼榮時稱之鏡湖一時侯伯各獻卉木以極奇觀其餘結構稱之前面野潤旁背山園宛如假山水距洛不能里餘而幽邃仙境其最秀者絹蓋山也一日

帝臨于此館時維盛夏暑甚公絹素蓋狀以此山雪景一坐生寒矣亡幾公老遂以爲嘉遁之所遷居焉公崇信浮屠薙髮着法衣禮常光國師而學禪應永中薨因以其居爲寺焉應仁中三好之賊爲亂火之殿堂牆屋一朝焚盡而求金閣在矣林泉之景不改其舊有茶室以南天樹爲楹鶯宿梅爲柱以支床樹陰上覆石徑回攀曰夕佳亭額題卽休僧高峰之筆也唐太宗山光佳日夕蓋是之意歟客殿至書院之間亘以長廊其地平坦以蔽有怪松一株大數圍剪成帆船之狀如向鏡湖其橋不過三四丈而舳舻三十丈實五百年前之物也傍書陸舟韓人海峰之筆揭之廊面焉或傳元弘以還天下大亂皇統爲二南北各立其主兵爭不止公患之乃請

二帝臨幸於正館供帳甚整以饗焉而兩解之相約以二統代立爲定制是以池泉不設一橋者以表彼此無相隔也耳今茲戊子之春予客于此院會 大內設博覽會場百芳方華不遑于游觀以往還之有期不能悉其名勝焉是歲季秋再來復淹留于斯講書之間略記所見聞而賦詩數篇錄于左

相公營造委兵燹一字空餘五百年彩鳳常栖金閣頂青松倒浸玉池泉遙求遁跡唯遺造長駐英名已上仙請見林丘紅葉地夕佳亭子煮茶煙

一世雄飛鹿苑公晚年營作蓋山宮清幽不改林泉趣豪壯猶存土木功奇石怪松留遁跡曲池高閣想英風兩朝南北連和策全在將軍帷幕中

洛外名山寂不譁英雄遁處最稱嘉三層金閣臨池上無數蒼巖立水涯地比菟裘傾魯室雲排輞野壓五家傳聞盛夏絹峰雪竟日 宸游駐翠華

高起池臺洛北邊清風皎月足逃禪自分湯沐私家邑留結香花遷佛緣兩祚構兵三四世中朝定鼎幾多年和盟誰是臨牛耳一任關東執事權

後水尾天皇御製

此ころの時雨にもりの紅葉もいかゞと

とはゝやな衣笠をか秋の色を來て見よとこそ鹿も鳴くらめ

池 水 半 氷

井伊直弼卿

をしかものすたくあたりは池の面の氷やいかによきてむすべる

○

連成法師

たかどのにしかききかてら來ても見よ衣笠山の秋のあはれを

○

かすみ立春のあしたも霧こめしあきのゆふへもきぬ笠の山

夜たまく金閣寺に來りてよめる

讀人しらす

みあかしはこかねのどのにはの見えて今もむかしの影をとむる

○

衣笠の山の月かけさえわたりこかねのうてなそり立つみゆ

○

古しへの道をかたらん人もなし衣笠をか夜ぞふけにける

美術建築としての金閣

京都府技師 阪谷良之進

金閣は鹿苑寺内に建てる一小建築であるが、寺の本名よりは、寧ろ此建築に因める「金閣寺」の方が昔から著名である、元來、金閣寺は佛閣として造られたもので無く、今を去る約五百餘年前に足利義滿の造營した北山御殿遺物である。應永十五年 後小松天皇この御殿へ行幸になつた頃には、境域も廣大で且つ多數の殿宇が完備し、特に御座の殿は八棟造の極めて莊嚴なものであつたといふ、義滿の死後禪刹となつて鹿苑寺と號した。爾來幾多の變遷を経て當初の殿宇は盡く廢滅又は改造せられたが、ひとりこの金閣のみは創建のまゝ完全に保存せられ今日なほ昔の俤を傳へてゐる。それ故此の建築を通じて當時の北山御殿の有様を知り、引いては室町時代最盛期の縉神の邸宅の結構をも可成り具體的に伺ふ事が出来るのであるかくの如く金閣は歴史上最も貴重なる資料であるばかりでなく更にその建築學上の見地から觀察するに現存の住宅建築の中美術的要素の豊富なる點に於いて此の右に出づるものはない。以下美術的建築としての金閣に就きいさゝか所見を披瀝して大方の教を乞ひ度いと思ふ。

さて、金閣は苑内の池に臨める三層樓で、寶形造の屋根は葺くに柿を以てし、頂上に金銅製の鳳凰を置いてゐる。各部の用材は比較的細く、屋根の傾斜は緩やかに、且つ薄き軒先は兩端に於いて上方に反轉

するので全體として頗る輕快優雅なる外觀を呈してゐる。右方池中に斗出せる切妻造りの附屬屋は又一段と趣を添へ、一見直ちにその設計の方針が専ら周圍の明麗なる風光との調和にある事を看取する事が出来る。かゝる方針の下に設計された建築は往々にして潑瀾たる生氣を缺き平凡單調に陥り易いものであるが、つぶさに此の建築の各部の形式手法を比較研究して見ると全く豫期に反し、反つて驚ろくべき周到巧妙なる方法を以て縦横に意匠の變化を試みてゐるのに氣が付く。

先づ各層の平面を見るに下層と中層は共に長方形にして柱の位置も亦上下一致してゐるが上層は特にその形を變へて正方形となしその柱の位置は下層のものに何等關係なきを以て宜きに從つて上層の大きさを定める事が出来る。此の長方形と正方形を重ねるは木造建築にありては構造上の無理が生ずる爲め普通用ひざる方法であるが、此の金閣に於いては上下の平面に變化あらしむる爲め、かゝる手段に出たのである。更に各層を細かく對比するに、初層は正面全部を廣椽とし、建具は主として蔀戸を用ひ、外部は白木造白壁となし、内部は處々、素木の上に直ちに極彩色を施してある。次に中層は正面左半部のみを廣椽に充て、建具は舞良戸及板唐戸を用ひ、柱間は箆板張りとし、内外總て蠟色塗となす、なほ内部天井及長押等には漆地の上に天人、靈鳥、樂器、雲等を彩繪する。最後に上層は廣椽を設けず、周圍の入口には棧唐戸を建て、其兩脇に華燈窓を設け、内外悉く漆地に金箔を押してゐる、是れ即ち金閣の名の起つた所以である。而して其様式は下層を藤原時代の寢殿造に擬し上層は純粹の唐様（禪宗佛殿に慣用された特殊の形

式）を用ひ、中層は内部を稍々複雑に間仕切りたると、建具の形式、其他により判断すれば、多分鎌倉時代の武家造の俤を存してゐる。

以上述るが如く意匠の自由豊富にして、手法の變化多端であるにも拘らず、全體として穩雅清新なる氣分の下によく統一せられ、觀者をして、些の不快澁滯の感を抱かせない點は如何に當時の建築家の手腕が非凡であつたか想像するにあまりある。

蓋しかゝる設計は從來未だ嘗てきかざる所なるが恐らくはその着想を古代の住宅建築たる寢殿造及武家造に求めこれに佛寺建築の長所を加味して一新機軸を出したものである。これを要するに金閣は我國現存の住宅建築中最古にして兼ねて最善なるものといふを憚らない。

再中興貫宗和尚略傳

當山再中興貫宗和尚は幼名を宗一と稱し尾陽東春日井郡鞍掛村に生れ父は徳川源敬院殿の御菩提所定光寺の役人にて名を周藏と稱した。師は十六歳にして、州の大林寺に入りて剃髮得度し十八歳の秋京都相國寺専門道場に掛錫し本光老師の鉗鎚を受くる事實に十五年の久しきに及び三十三歳の春初めて當山の住職

となり荒廢其極に達せる當山の經營に當り兼ねて幾多の社會事業に苦心奮闘を重ね明治四十一年二月廿五日世壽七十三歳を以て溘焉として示寂された。

願れば徳寛宏に才穎優にして應世の器を具した師は荒廢其極に達せる維新後の當山に住し横村知事の廢佛主義と闘ひ、遂に上地の返還を請ひ金閣保存會を興して寺門の復興に精勵すると共に、其本山たる相國の山規及び寺産漸く紊れて收拾し難きに當り東奔西馳苦辛慘憺遂に一山を盤石の安きに置き尙廣く宗門各派の爲めに貢獻する處頗る多きものがあつた。現今の京都府立醫科大學附屬療病院の前々身たる療病館は實に師の首唱創設せる處にして、病者爲めに救はれ道俗共に師の徳を頌せざるものはなかつた。師は常に茶儀生花の道に親しみ亦圍碁に長じ、伏見宮を始め奉り各宮殿下の恩顧を受け大官縉紳の來訪踵を接いだ殊に伏見宮御殿の御召に依り時々伺候して、烏鷺を闘はして、其寵遇を受け、一度び病革まるや殿下には特に親翰を賜はりて厚く慰問せられたなど師の名譽此上もなき次第であつた。

示寂後時の相國寺派管長中原東嶽禪師は祭糝料を贈り誄辭に、本山の柱石、本職の股肱を失へりと悼惜せられたるが如き蓋し師の一斑を窺ふに足るものである。因みに維新前後一たび輪住の制となりしを師に至つて特住制に復したれば再中興の實を擧げたるものと云ふべし故に特に其の略傳を附記す。

金閣小史 完

〔附 録〕 鹿 野 苑

雪山の麓に數多の鹿が棲んで居りました其の中に二匹の鹿王がゐるまして部下を取締つてゐたのです彼等は大變に仲睦じく楽しい生活を續けてゐましたある時波羅奈斯國の王様が多數の家來ごにも鹿狩を始めました雪山の麓を取圍んで群れ集ふ鹿を一匹も逃すまいご矢叫ひの音凄じく狩立てましたアハレ釜中の魚ごになりました二匹の鹿王は多くの年月を経て人にも近い智恵をもつて居ますごりわけ一匹の王は情けいご深くて多くの鹿を救つてやりたいご心を碎いてなやみました王様の處へ行つて多くの鹿のために命乞ひをしようご決心しましたそこで圍みを脱けて王様の陣所に行き足を屈め身を投げ伏せて意の中を語らうごする状態はまごこにあはれに見えました王様はそれを察してコリヤ汝は鹿王ご見える汝はこれから毎日一匹づゝ鹿を獻するならば一度に討ち亡ほすごこは控へてつかはすご申されました鹿王は之を聞いて急ぎ歸つて群鹿にこのごこを言ひ聞けまして一方の鹿王ごも相談して互ひに配下から一匹づゝを獻するごこに致しました其の後ち一匹の牝鹿の番に當りました處が恰度懷妊して居りましたせめて安全に子を産むまで我身の犠牲ごなるごこの猶豫を願ひましたけれども無慈悲の鹿王は聞き入れませんそこで詮方なく情深い方の鹿王の許に往つて兒を産むまでの命を乞ひ求めました情深い鹿王はよし／＼

こ承知してそなたは安心して子を産むがよい外の鹿を汝の代にしてやらうこ快よくうけてやりました牝鹿はこの
 慈悲に泣いて歸りましたがさて一體誰を身代りに立てやうか鹿王は案じましたがだれこても命の惜しいは同じ
 ここで一日も長命したいものをこいつて身代りを立てないこ王様は承知してくれないア、如何にしやうかこ惱ん
 だ未オ、われもやがては組上の肉こならねばならぬ身であるごうせ一度は犠牲こなるこの身なればむしろ我こそ
 彼が身代りにならうさすれば他の鹿の命をも縮めぬ道理よし進んで王の腹を肥やして呉れんこ深く決心しました
 配下の鹿はそれこ知つてわれもこ身代りたらんこを申し出ましたけれど情に厚い鹿王のここですな
 かく之を許さないで唯獨り波羅奈斯國の王様の厨に身を投じました元來聰明な王様のここですからアこの鹿王
 は他の身代りに來て組上に身を横へたものであるここを察せられたく感動して鹿王の頭を撫でながらに涙を浮
 べてア、鹿王よ汝は鹿の形をなせる人なるよ我は人の形をなせる鹿なるよ情を知らぬ我は汝の群を亡ぼさんこし
 たしかるに汝はけなけにも身を棄て、他を救はんこするその富める情さても貴き心根なるよ己の腹を肥やさんが
 爲めに汝達を苦しめたここの罪深きこよわれ甚だ過てり以後は罪なき生類の血を流すまじ又汝達の肉を求める
 ここはすまいこ堅く誓つて鹿王をいたわり山に送り歸らしめました王様はその後彼等の棲める地一帯を永久に殺
 生禁斷の場所こ定め群鹿遊戯の苑こなされましたそこでこの處を鹿野苑こ稱へるやうになつたのであります

小史は大正十二年二月從前の歴覽記を裨補して
 裝幀を加へたるに過ぎざるものなれば簡に失し
 て要を缺くこ多し然りこ雖も素より史乗の文
 獻に供せんが爲めにあらず畢竟史蹟名勝を槩觀
 するに資すれば足るものなれば今や再び補裝す
 るに方り敢て原本を損はず間々字句を修正し遺
 漏を増補したるのみ以つて聊か昭和の大典を紀
 念せんと欲するものなり

known as Ryumon-no-taki (*Dragon-fall*). The big stone below the water-fall is called Rigyo-seki (*Carp-like-stone*). The bridge is called Kokeikyo. The name of this pond is Anmintaku. The small tower on the island is called Hakuja-no-tsuka.

The small building near the stone is called Sekkatei and is a typical bower for ceremonial tea-drinking. It is said that the Emperor Gomizuno-o favored a visit and enjoyed tea-drinking there. It contains a celebrated pillar made of a nandlam tree about 9 inches in circumference. At the building, there is also a stone called Kijin-jo (*Chair-stone*). It was so named according to its chair-like shape. Outside is a stone basin in the form of Mt. Fuji.

Now visitors have seen all the garden, it will be worth while, on the way end, to see the Fudo-Temple. This temple seems to have been built long before the foundation of this Kinkakuji. Just behind the temple there is a little spring called Tokko-sui. There are some traditions about this spring.

The water of this spring is believed to have many virtues for various diseases, and many folks come here for the water.

建 勳 神 社	東 北 ノ 部	京	御	相	二	二	北	平	東 南 ノ 部	里 程 概 略 表 (金閣寺ヨリ)
		都	國	條	條	野	野	神		
十二 丁		驛	所	寺	驛	宮	社	社		
		二 里 五 丁	三 十 五 丁	廿 五 丁	廿 三 丁	廿 三 丁	十 八 丁	八 丁		
		嵐 花 園 ヨリ 汽 車 ノ 便 アリ	御 山	花 室	妙 驛	等 心 持 寺 院	等 心 持 寺 院	下 西 南 ノ 部	上 賀 茂 寺	大 德 寺
			二 里	廿 三 丁	二 十 八 丁	十 三 丁	十 三 丁		三 十 五 丁	三 十 五 丁

發 行 所	京 都 北 山	金 閣 寺	及 印 刷 入 所	印 刷 所	發 行 者 兼	編 輯 者 兼	京 都 伊 藤 北 山 宗	昭 和 三 年 十 月 十 日 發 行	昭 和 三 年 十 月 五 日 印 刷

The Sho-in (*drawing room*) was rebuilt during the Teikyo Era (1684-1686). All the pictures on the sliding screens of this room are the works of Ito-Jakuchu (1715-1800). The elevated floor was for the use of the Emperor Gomizuno-o when the Emperor paid a visit to the temple. The pictures of the small sliding screens were painted by Hōgen-Hiromichi.

(So much for the temple, now the visitors will be introduced through the garden).

The big trees here and there are called Ichii-no-ki. The bell in the bell-tower is said to have been made in China and called Ōshikisho (*Yellow-Coloured-Bell*). The old tomb by the bell-tower is where Jozo-Kisho was buried.

NOW THE VISITORS HAVE COME TO
THE KINKAKU OR GOLD PAVILLION.

There are five stones named Yahaku-seki and it is said that they were carried from China. The place is called Hosui-in and the three images, just in front were all sculptured by Unkei, very famous sculptor; the image in the eastern alter represents Muso-Kokushi, the first abbot, and one in the western alter Shogun Yoshimitsu, founder of this temple. These sculptures are all master works of art and have been added to the national treasures. The next place is called Sosei, where Yoshimitsu used to wash

his hands.

The name of the pond is Kyoko-chi (*Mirror pond*). It contains many small islands and oddly shaped stones.—Degame (*going tortoise*), Irigame (*Coming tortoise*) and Ashihara Ishima, Hatakeyama-ishi, Akamatsu-seki and Kyu-Zan-Hakkai-seki etc.

The third story of this Kinkaku is called Kuko-cho. The tablet bears an inscription written by the Emperor Gokomatsu (1393-1482). The ceiling of the third story is said to be made of a single board of camphor-wood. To the west of the building is seen the symmetrical form of Kinukasa-yama (*Silk-hat-mountain*). According to one tradition, in a summer time Yoshimitsu had covered it with white silk, in order that it might appear as though it were covered with snow.

The statue of Kanzeon in the second story was sculptured by Reverence Eshin. The other by Kōbo-Daishi (779-835). The picture on the ceiling were painted by Kano Masanobu.

(So much for the Gold pavillion. Visitors will be introduced to the northern garden).

The very old Shrine in the garden is called Shin-un. Near by the shrine are springs called Ginka-sen (*Silver spring*) and Ganka-sui (*Rocky spring*). The Ginka-sen furnished Yoshimitsu with water for use in the tea ceremonies. Ganka-sui is said to have been used for washing hands by him. The water-fall is

A SHORT HISTORICAL SKETCH

OF

THE KINKAKUJI.

KINKAKUJI, whose proper name is Rokuonji, belongs to the Zen sect. It was a pleasure house of Saionji Kimitsugu. At the end of the 14th century Ashikaga Yoshimitsu, after abdicating the shogunate, retired to this place where he became a Buddhist monk. Here he made a beautiful garden containing a pond, on the bank of which he had Kinkaku (*Gold Pavillion*) constructed. This famous Kinkaku has three stories and the upper one is the Kinkaku proper. Its ceiling, railing etc., were once embellished with gold, only a very little of which remains at present.

GUIDE TO THE KINKAKU TEMPLE AND ITS GARDEN.

(Visitors are first introduced to the buildings)

The Hōjō (*abbot's residence*) was built in accordance with the order of the Emperor Gomizuno-o during the Empo Era (1673-1680). All the pictures on the sliding screens of this room were

— 2 —

painted by Kano-Tannyū, one of the most celebrated painter at that time. The tablet bears an inscription Rokuonji written by Chinese reverence priest Shingetsu. Rokuonji is the proper name of this temple, Kinkakuji being the popular one. (All the hanging pictures and antiquities and various other treasures which are exhibited in this room are often changed, so the history of these things are omitted here.)

The chief image is a sitting statue of the Sho-Kwanzeon by Jocho. It was, it is said, enthusiastically worshiped by princess Tofukumon-in and was given to this temple by the Emperor Gomizuno-o (1612-1680), the image on the right side represents Muso-Kokushi, first abbot; and that on the left, Ashikaga Yoshimitsu, founder of this temple. In the garden before the Hōjō, there is a noted camellia tree, which is said to have been planted by the Emperor Gomizuno-o in person.

All the big stones in the garden are celebrated for their peculiar shapes; the first one is called Me-ryo (*Female Dragon*), next one Hotei-ishi; next one Sōma-seki (*Running Horse Stone*); and the last one Roban seki (*Receiving dew stone*). At the back of this building there is the famous and curious Rikushu-no-matsu (*Land-Boat-Pine*), which is trained in the shape of a Japanese junk about five hundred years old. The inscription of the tablet was written by Kaiho, a Korean.



金閣寺
寫意畫

金閣庭園寫意畫 (現放光畫)

THE SHORT GUIDE BOOK
TO
THE TEMPLE AND GARDEN
—
KINKAKUJI.
KYOTO JAPAN

249
203



